



編集・発行 邑楽町役場企画課

〒370-0692(住所記入不要)

☎ 0276-88-5511(代表)

☎ 0276-47-5007(企画課直通)

☎ 0276-89-0136

☎ http://www.town.ora.gunma.jp

✉ koho@town.ora.gunma.jp

邑楽町携帯サイト
2次元コード対応の携帯電話は、右のコードをご利用ください。読み取りができない場合はURLをご入力ください。
携帯用URL http://www.town.ora.gunma.jp/k



若い人たちに語り継ぎたい、
次の世代に残しておきたい。
貴重な話をお届けしますー。

あすへひとこと

いつの時代までも残したい

邑楽町の昔ばなし



当時は柄の溝が彫られた板に糸を巻き付け、色付けをされていた中野
紺。現在は、糸を染めるときに色を抜く方法で、紺柄を再現しています

鶺鴒織と鶺

邑楽町の地場産業として戦前盛んだった中野紺(なかのがすり)には、古い歴史がありました。大正時代には「西の大和紺、東の中野紺」といわれるほどでした。

この中野紺の起源は、遠い鎌倉時代。その頃すでに綿の縞織が織られていたそう、主に浴衣地として広く愛用されたようです。

これを人々は鶺鴒織と呼びました。そもそも鶺鴒織とは木綿織が鶺の里で織られていたので、生産地の里名をとって名付けたという話があります。

しかし、これはそれより昔のまだ鶺という地名のないころの話であります。木綿の縞織の技術を編み出した里の女たちは冬の仕事としては、もっぱら織物に専念していました。

ある静かな暖かい朝、機織り場近くの木に数羽の鳥が飛来して羽を休めていました。織り子たちはこの鳥の羽の色が地味で、自分たちの織っている縞織と似ていることに気付きました。

その鳥の名がウズラという名であることを知った織り子たちは、誰言うたなく自分たちの織っている縞織を鶺鴒織と呼ぶようになりました。



中野紺の伝統を
現代に伝える

中野紺会代表

小久保しず子さん
(前原・4区)

30年以上活動を続けています。現在は、中野紺の技術を元に「なかの織」として、織物を行っています。今年は、その中野紺柄を生かしたコースターを試作。いずれは邑楽の土産物になるような商品をつくっていきたいです。そして、一緒にやっていただける人も募集しています。



試作品として作成した、
中野紺柄のコースター

あるいは鶺鴒織の盛んな場所であったところから、この地を鶺と呼ぶようになったのだろという者もいます。別に地名の起こりについては、鎌倉時代、足利の庄の館に住んでいた足利義兼が命名したという説もあります。いずれにしても、鶺の地名の起こりは足利時代にさかのぼれそうです。

【発行】邑楽町老人クラブ連合会 【編集】あすへひとこと編集委員会
平成10年12月31日発行「高齢者の語り(第六集)あすへひとこと」より



朝もやの中を
(多々良沼)



Photo 原田八重子(記録ボランティア)

ひとりごと From editors

平成29年1月8日の成人式典に、受付&広報委員として参加しました。新成人の皆さんのキラキラした表情と、色とりどりの晴やかな着物に、なぜかものすごくワクワクし興奮状態に。会場に溢れる新しい風もピンピンと肌で感じられました。▶新しいと言えば今年の「立春」は2月4日ですが、旧暦でいうとお正月のような扱いになるので、前日の節分は大晦日にあたるそうです。なので豆まきや柊鰯などで邪気を払うのですね。▶「立春」と言っても1年で最も寒さが厳しい頃です。でも、ふと見上げた木々の枝先には膨らんできた花の蕾を見ることが多くなってきて春の息吹を感じられます。▶今年の恵方は北北西。恵方巻きにかぶりつきながら、どんなことをお願いしようかなあ(久保田)



この広報紙は、自然保護のため
植物油インキを使用しています。